



北海道札幌

徳辰科大子

八田三郎叔
必親所



大坂市西區南堀江通壹丁目
勝本忠兵衛

おとす所一、家こらぬ下
る書お究仕、おの存
情銘所傳、鳥居氏の
辨疏全々春二大の竹の
ゆめ、心をか感懐を言葉
したるかの極深みおえに
飛政と心さよ心すこと
此おる考自身が言部
と表意あし、中、心ぶが
おるは芽出たに限り、
さす、心生、美人、おれ
と仰せある程、悪人、は
此心先、つ、中許お見と
申込、お、何、の、辨明
書、公、計、の、後、お、さ、か

申渡之何 何の辨明

書公討の徳能あるか

勝るにふふ果たると人物

を信じたるか存て嘯の

八百餘の鳥女の上鞆中

鳥女の威を誇りて云々は

之は後おのれ生定るとし

言明したるといふとて

平代監査役が為るとし

承知とあり申居るとか

如京にも平代女お百も

承知故や生と金持せら

る、此以イヤハヤ突止の

正しくする

辨明

此を以て際何ぞ辨明の

必要と認められぬが

感情と思ふは思ふ事

を直ぐも感情と雖も傳

裁断は是れ

事柄の計畫に付して

考へて取らるるは

底危険(物望上)に在る

如流の如く見るに視

ゆる後徐ろに操業

る為余の如

實に一日も早に辭し

其職名を考へ居る

簡單なる務を以て天

と仰るは生かすに

簡筆あるが、後念が于休

とめたるは、小生に於て

筆の片らき、或ありと

其の居る若し、少くも

調子に奪りて、筆存し

居らむ、一年か半年、存

身甚むと、或は、或る

請合、思く、標然と、め

小人と呼ば、呼ぶ、可人

と評せ、評せ、自らと

付、吾も、思ひ、の、信、こ、も、さ

何、深、た、る、と、其、の、中、に

此、年、寤、を、め、極、に、直、お

信、し、自、高、の、碑、と、せ、ん

小生を、断言、仕、ら、ぬ、故、に

許し、陰、に、惡、口、は、不、可

小生を新言仕り給ふに
對し甘言の毒口は不仲

ハ事し七十五

有り林女と強打と集り

遊第と辭任と熱意の也

老一居られん
感情の此れ也
申上るる

久しきおとら由出の
友

十一月七日

高橋

つ回老人の文

有る子能の事申上る
云々は甚し
ま子一書